

生存科学とは

1. はじめに

およそ「科学」とは、医学や自然科学だけでなく社会科学なども含めて——分野により、その目的は異なるが——認識された現象の抽象化を軸として進められるという点で共通項をもつ。そして、この抽象化は、「概念」の創出という作業によっておこなわれるが、概念自体が次第により高次の概念に包摂されていくという過程を辿ることになる。こうして、諸概念の内容ないし適用範囲も明確にされることになる。なお、こうした概念の形成にあたっては、演繹、帰納の論理が駆使されるし、さらに既存の概念の枠外の新しい現象が出現したような場合には、新現象に対応できる新概念の誕生までは、「あたかも既存の概念に含まれているかのように」取り扱う論理、すなわちフィクションの論理が大きな役割を果たすことになるといえようか（概念自体が、一度現実から遊離してまわりみちをするフィクションの性格をもつことも多いが、両者の関係については、ここでは触れない。猶フィクションは虚言ではない。）

ともあれ、科学を上述のように定義してよいとすれば、武見先生の生存科学論は、ゆるぎない科学としての方向付けに満たされており、しのぎを削っている多くの科学論の中での代表作というべきものである。それは、決して単なる観念論ではない。未完成ではあるが、人類の文化発展の起動力としての役割を果たすことのできる科学論である。したがってまた、できるだけ多くの人の理解と協力の促進が必要となる。そのために、以下、武見理論の特色を要約して示しておきたい。

2. 武見理論の要約

「生存科学」は、故武見太郎氏が医学の科学的基盤を模索するなかで到達した、包括的、学際的、総合的な学問体系概念モデルである。とはいえ、完結した概念モデルというよりは、むしろ人間について考えるあらゆる人びとにつねに問いかけ挑戦し続ける概念である。武見氏は、医学とは何か、医学は何をなすべきかという問いに答えるために、その根幹にある基盤科学として生存の理法に基づく生存科学を構想され、本来は広義の医学概念であるライフサイエンスとして提唱されたものである。

しかし生存科学は医学概念にとどまらない。人類の生存秩序を、個人の生存の場から、集団としての地球的規模における全人類の生存の場まで包括的にとらえようとする学問である。人類の生存秩序には、生物学的秩序、社会経済秩序、精神生活秩序、さらには政治的な秩序があり、それらすべての秩序の中に生物的要素が大きく存在すると考えるのである。

ひとり個人の生存のみならず、同時代の地球上のすべての人びと、そして世代を超えて、人類のより健全な、より人間らしい生存を目標として、既存の科学、それも自然科学のみならず社会科学、人文科学、さらには哲学・宗教・芸術までも含めた全人間的知識の見直しと統合を科学的に行おうとする試みでもあった。そして、その目的に沿った新しい科学技術やテクノロジーの開発までを包括しようとする概念である。

したがって、従来の縦割りの学問分野を寄せ集めて束ねるのではなく、哲学から分子生物学に至る人文・社会科学、自然科学を包摂して、ミクロからマクロに至る各レベルにおいて、それぞれの分野の理論思考を相互に統合させつつ体系化をはかろうとする、より本来的な包括概念として生存科学は構想された。

武見氏は、あらゆるレベルでの人間の生存を考慮に入れて、本来の意味での福祉を本質的に人類のために考えることが生存科学と呼ばれるに値すると考えられた。生きることは人類のすべての営みの出発点である。誰が、なぜ、どのように、さらに、いかに生存すべきなのか、という問題提起から始まり、個別の生命現象としてとらえるとともに、地球規模で人びとが共存していくために、何を考え、何をすべきなのかを英知を集めるべきである。そのために、生存科学が開発途上国から高度の先進国までを含めて、現状を把握し、未来の方向を作っていく基礎的な学問として成立し、世界的な発展を図る場としてハーバード大学に武見国際保健講座を開設された。

武見氏は、生存科学の現実的モデルとして国内では先進的かつ包括的な地域医療モデルを提示された。さらに地球規模のエコロジー概念を前提とした倫理的アプローチによる健康資源の配分、さらにバイオエシックスやバイオインシュアランスという概念も創出され、現代のわれわれに問いかけ続けている。

3. 期待

以上で、武見「生存科学」論の解説を終わる。先生の提唱されたこの概念の充実、発展をひたすら願っている基金としては、すぐれた生存科学論が相次いで出現することを期待する。

以上